

延辺と私（その4）.....	1	NEAR Recommends	12
新任研究員紹介	4	NEAR 短信	13
回顧と展望	5	NEAR センター市民研究員の活動一覧	14

延辺と私（その4）

島根県立大学副学長・NEAR センター研究員 飯田 泰三

1993年8月7日、午前5時、前夜聞いていたのよりも1時間ほど早く、延吉に着いた。駅に出迎えてくれていたのは、延吉国際旅行社の金香福（キム・ヒャンポ）さんという若い朝鮮族の女性だった。この6月に延辺大学を卒業したばかりで、9月から合弁企業に就職が決まっているのだが、それまでの夏休み中のアルバイトに、この旅行ガイドをやっているとのことだった。

空港から延吉の街の中心までは比較的近く、20分くらいで自治州共産党州委員会本部の前にある白山大厦に入る。韓国からの団体客でゴった返している中で朝食を済ませ、昼前まで仮眠をとる。そして町の朝鮮料理屋で昼食をとった後、延辺大学を訪問した。

同大学民族研究所長の崔洪彬氏から、中国共産党の民族政策との関係における延辺朝鮮族自治州の位置づけと歴史、また、それを対象とする延辺大学民族研究所のこれまでの活動状況などを聞く。そして、9日に昼食を兼ねて民族研究所の方々と会見してさらに詳しい話を聞くことになり、また、10日に同大学の東北亜経済研究所、および吉林省延辺博物館をわれわれが訪問する仲介・斡旋の労を、崔所長がとってくださることになった。

大学構内を散策した後、延辺市内を旅行社の車で一回りしてホテルへ帰る。ホテル内の餐厅で夕食をとり、同じくホテル内の書店で、延辺自治州のかなり詳細な地図（内部発行）を買った。この地図では図們江の中洲（川中島）の何箇所かが、ロシアとの国境線が明示されない白紙になっており、それが内部発行（国外への持ち出し禁止）となっている理由と推測された。



8月8日、朝食を済ませて8時、図們・瑯春方面の視察に車（ランドクルーザー）で出発する。

図們市への入り口を過ぎてまもなくから、道路は図們江の川沿いに走る。北朝鮮の山

や釣りをする対岸の人影なども間近に見える。涼水鎮と密江の中間あたりで、対岸に200人あまりの女性を中心とした集団が、労働奉仕か、バスでやってきて川の砂を掬いトラックに積み込んでいるのが見えた。このあたりでは、朝鮮側の監視塔が山のかなり高いところにあつて、川沿いに道が蛇行していく間、しばらく見え隠れしていて、ちょっと不気味な感じだった。

英安の少し道路を外れたところに、朝鮮戦争中の爆撃によって中央部を破壊された橋があったので、その破壊されたところまで徒歩で行ってみた。対岸の朝鮮側の橋のたもとで、やはり砂を採取して牛車に積み込んでいる農夫らしき姿が近くに見えた。徐京植さんが朝鮮語で呼びかけたが、応答はなかった。この橋と平行して、今は橋桁だけが残る鉄道橋もあった。

琿春市に入り、まず市の公安局に寄つて、金ガイド嬢の姉（警察学校を出て市公安局に勤務）に同行してもらい、琿春市人民政府の建物にある琿春市外来客商投資中心を訪ねる。琿春市で目下展開中の経済開発、ロシア・朝鮮との国境貿易、ロシアの港につなぐ鉄道・道路建設、などの現状と将来計画について、具体的な数字をあげた説明を聞いた。そして何点かの資料と、琿春市の詳しい地図（内部発行）をもらった。

そのあと金姉女史の案内で市街の狭い路地を入ったところにある小さい朝鮮料理屋に行つて昼食をとる（おいしい冷麺のほか、兎肉のスープなど）。そのときの金姉女史の話では、琿春市近郊の炭鉱に、漢族の労働者が多数移住してきて、治安が悪くなったこと、カラオケの店が増え、それが売春宿になっていて風紀を乱している、といった話が印象に残つた。

それから防川（図們江の中国領としては最も下流に位置し、新潟で聞いた港を作つて日本海に出るルートを作るといふ話が出てくるのはここである）に行く方法につき協議したが、同地は7月1日から外国人立入禁止になっており、その許可をあらかじめ得れば入れるが、それには時間がかかる

こと、また、琿春・防川間だけで片道2時間あまりを要し、いずれにせよ今日中にそこまで行つて延吉まで帰るのは難しい、ということであつた。

また、ロシアとの国境、長塔子には金姉女史もまだ行ったことがないというので、結局、朝鮮国境の沙塔子へ行つてみることにした。沙塔子の海関（税関）には金姉女史の知人がいるので、頼めばあらかじめの許可なしでも入れそうだという。

料理店を出て、市内の金姉妹の実家に立ち寄る。琿春市全域で進んでいる再開発のため立ち退きを余儀なくされ、平屋で2部屋+台所の、昔日本人が住んでいたことがあるという古い家に移つたのだそう。お母さんが歓迎してくれ、また退出する間際にお父さんも外出先から帰宅した。

金姉とその子（4歳くらいの男の子）も同乗して、沙塔子に向かう。30分余で海関に着き、写真撮影をしないという条件で、国境のところまで入つてよいということになった。国境は、柳多島という中洲の朝鮮寄りのところを通つており、中国側の監視所と朝鮮側のそれとの間を400メートルほどの橋でつなぎ、国境線は朝鮮側監視所から50メートルあまりのところにあつた。

われわれの外に5、6人の中国人参観者がおり、監視所から衛視が1人、国境線のところまで同行した。衛視は丸腰で、子供が一緒だったせいもあり、まるでピクニックに加つたような雰囲気、気楽に一緒に歩いた。橋を往復して帰る途中、小麦粉か何か食料品を満載したトラックが3、4台、中国側から朝鮮側に入つてゆくのに行き違つた。

琿春市内に戻り、公安局で金姉母子を降ろして別れを告げ、図們市に向かう。途中、図們江対岸を朝鮮のSLが走っているのが見えた。4時半ごろに着いた図們市の海関の付近は、韓国人観光客目当ての観光地と化していた。

2円で双眼鏡を借り対岸を覗いたところ、朝鮮側の海関を、親族訪問から帰る朝鮮人たちが、山のような荷物を背負つて通過し

てゆくのが見えた。

6時に延吉に帰着した。朝鮮料理屋で牛肉、羊肉、烏賊の焼肉を中心に夕食を済ませ、金香福さんの案内で西市場の夜市に出かける。今年から始まったもので、夜中の1時、2時までやっているそうで、食べ物屋、ゲーム、カラオケコーナー、電腦写真、等々の屋台が店を連れ、くつろいだ楽しげな雰囲気満ちていた。冷やしたマッコリがうまかった。

8月9日、10時に延辺大学民族研究所を約束により訪問する。先日の崔洪彬所長のほか、朴昌昱同研究所教授と、もう1人の研究員が待っていた。朴教授は同研究所の長老教授で、崔所長もその弟子筋にあたること。小学校3年まで日本統治時代だったので、40年以上使わない日本語だということにかかわらず、きわめて流暢かつ雄弁に日本語で話す。氏のほとんど独壇場と化した1時間半の会見ののち、料理屋に席を移し、参鶏湯（サンゲタン）の昼食を共にしながら談笑のときをすごす。

朴教授によると、中華人民共和国吉林省の延辺朝鮮族自治州の今後のあり方につき、延辺大学民族研究所では、大学発足以来ずっと議論を重ねてきたが、最近、その結論らしきものがまとまった。それは、「大韓族主義」でも、「地方民族主義」でもなく、朝鮮族の経済・文化の発展を通じて、「中華民族」（各民族大連合体としての）の形成に貢献すべきだ、というものである。

そして将来、南北朝鮮が統一するようなときには、自分たちは媒酌人、仲人の役割は果たすが、それに加わることはしないという。中華人民共和国の中に少数民族が残っているかぎり自分たちは最後まで残るといのである。逆に言うと、延辺の韓国人観光客の態度に見られるような、札東で頬つぺたを殴られるような韓国の資本主義体制の下に入りたくないし、かといって、金日成総合大学に留学した延辺大学生が北朝鮮人学生と話すことも許されないような、閉鎖的な北の体制に入ることもしたくないと

いうわけであった。

ホテルに戻ったのち、延吉市内の新華書店に出かけ、ハングルの本も含め、全員でやっと持ち帰れるほどの分量を購入した。夕食はホテルに近い東海飯店でとった。太刀魚の天婦羅や、牛のアバラ肉のブツ切り煮込みなどがうまかった。

8月10日、午前10時、雨の中を延辺博物館に行く。あらかじめ崔洪彬・民族研究所長から話が通じていたわけだが、金哲洙・副館長の応対を受ける。金氏は中国東北朝鮮民族史学会副理事長でもある。ちょうどこの9月3日が延辺朝鮮族自治州成立40周年にあたるということで、博物館はそのための特別展示の準備に追われており、抗日戦争や自治州成立などの歴史関係の展示は見ることができず、民俗関係の展示室のみを参観した。そして館内の売店で書籍・資料を購入する。

そのあとの金副館長との会談で、最近の抗日戦争関係の研究の集大成として『東北抗日聯軍闘争史』が話題となり、同書が入手困難なので金氏個人所有の1冊を分けてくださることになる。また、延辺での抗日闘争関係の遺跡など、近辺で見るべき場所についてアドバイスを求めたところ、天宝山麓にある老頭溝の「万人坑」跡について、龍井民族博物館の館員に同行してもらえば参観できるはずだという情報を得る。

博物館を出たあと、延吉賓館の商場に立ち寄り、何か延辺関係のハングルの書籍でもないかを見たが、大冊の延吉市統計年鑑が1冊だけあった。昼食は前夜と同じ店で狗肉料理を食べる。

食後、約束により、延辺大学に東北亜経済研究所の人たちと会うために出向く。ところが、崔民族研究所長が待っており、昨夜、東北亜経済研究所の人たちに、数日後に開かれる韓国の学会に出席するためのビザが下り、今朝早く図們市まで身体検査を受けるために出発したとのこと。やむを得ず、外事処長に挨拶に行き、『法政大学の百年』とネクタイを、プレゼントに置いてくる。

ホテルに戻ったうえで、書籍を郵送するために延吉郵便局まで車で赴く。5キロずつの荷物7個分になったが、布地を買って1個ずつ針と糸で縫い合わせて包装せねばならぬという。1時間以上もかかり、5時の閉局時間が迫ってくると、2、3人のスタッフが手伝ってくれ、なんとか間に合った。

夕刻、徐京植さんと旧知の辺英浩（ピョン・ヨンホ）さん（在日朝鮮人。神戸大学博士課程修了。大阪経済法科大学アジア研究所研究員）が延辺大学朝鮮問題研究所助教授の徐日範氏を伴って来訪した。辺さんはこの夏休み、延吉に短期滞在中で、ガイドの金香福さんが延吉市で寄宿している叔父さん、南天寿氏の次女、南紅梅さん（延辺医学院学生）のボーイフレンドでもある。

この人たちと都合8人で、延辺大学近くの、北朝鮮系と合併で出している高級朝鮮料理店で夕食を共にする。熊肝酒などを飲みながら歓談。隣室では、朝鮮の歌を唄いながら踊っている一団がいた。

そのあと、たつての招きで南寿天邸に立ち寄ることになる。南氏は延吉職工大学校長。夫人や長女の南雪梅さんともども、葡萄酒などふるまって歓待してくれる。

ちなみに、辺英浩さんは、その後、都留文科大学助教授となり、政治思想学会等ではしばしば顔を合わせるようになった。そして、朝鮮儒学史研究でわが県立大の井上厚史さんと親しく交流する間柄となり、5年前の「思想史の会」（私と和田守さんの呼びかけで16年前に発足し、法政大学を会場に年3、4回開催している）で、辺さんの近著を井上さんに書評してもらったことがある。

なお、この日、ガイドの金さんが困った表情で相談に来た。運転手の陳さん（漢族の30歳前後の青年）が、先日の琿春方面のドライブが、あらかじめ出ていた計画書では「図們江視察」とだけあったので、図們市から先の部分は追加料金が欲しいと言っているというのである。また、翌日の龍井行きも、計画書には「延辺周辺」とあったから、これもエクストラ料金が要る、ガソリン代も余分にかかるし、と。日本円で2～3万円を要求しているらしい。のちの長白山（白頭山）行きの際に機嫌を損じて事故でも起こされたらおおごとなので、1000円を明日、金さんを通して渡すことにする。長春のガイドの李豹さんの言い草を借りれば、「ここは中国ですから」ということか。（以下次号）

新任研究員紹介

《NEARセンターは、2013年4月より新たに2名の新任研究員を迎えました。今号は、村井洋教授の自己紹介を掲載します（編集部）》

北東アジア地域研究センター研究員に 就任して

村井 洋

ヨーロッパ政治思想を研究対象として選んだ私のような者にとっても、北東アジアに向き合うことを自らの課題とし得たこと

には感慨一入のものがあります。朝鮮戦争の最中1951年生まれの私の世代は東アジアの同時代の事件に心を留めながら歩んできました。宇野重昭名誉学長が先頃の講演会で「『同文同種』という言葉は慎重に理解しなくてはならない」と語ったことから蘇ってきた記憶は、1967年に読んだ本のことでした。著者吉川幸次郎氏は中国人の古典とその生活にかかわるその本で、日本人が漢文を学習することで中国を理解したつもりになってはいけなさと戒めていたのです。それは高まる文化革命の報を耳にしながら高等学校の図書館の書架から初めて借出した本でした。それから数年後、たまたま訪

れた東京都心のある大学の庭から、隣接するホテルの客室の窓に五星紅旗が翻っていたのを眺めた記憶があります。当時そのホテルには新たに国交成った中国の臨時の大使館事務所が置かれていたのです。

ヨーロッパ政治思想の研究者が同時に北東アジアを研究することの意味はどこにあるのでしょうか。近代史を振り返ると、アジア人にとってヨーロッパとは力そのものであったと思われます。坂本義和氏が『核と人間』で述べているとおり、ヨーロッパ世界は主権＝国民国家と原子爆弾とを頂点とする力の体系を築きあげ、アジア・アフリカ地域へと膨張させたのです。しかし同時に、この力を反省し抑制しようとする努力もまたヨーロッパが生み出し、アジアの諸文化がそれを受容継承しようとしていることも事実です。ヘーゲルとマルクスによって深められた弁証法的思考はその一例でしょうし、立憲主義や反省的近代化論、ハーバーマスの熟議的デモクラシー論もその中に数えられるでしょう。

さらに、ヨーロッパ思想とアジア諸地域の思想には共通する志向が見られるという洞察も久しく聞いているところです。たとえばドイツのカール・ヤスパースが、死、苦しみ、負い目という人間存在の限界状況への洞察が超越的思考を生み出したという「枢軸時代」の指摘がそれにあたります。ヤスパースが1950年代にハンナ・アレントと交わした手紙には孔子、老子など中国の古代思想に出会った喜びを率直に語っているのを読むことができます。

比較思想研究の関連では中庸思想が思い浮かびます。2010年、私は本学のサバティカルを得てニューヨーク州のバード大学のハンナ・アレントセンターに寄留する幸運に恵まれました。ロジャー・バーコヴィッツ Roger Berkowitz、オリビア・カスター Olivia Custer 両教授のご厚意の研究会でアレントの判断力概念についての問題意識を投げかけたとき、出席者の1人ウィリアム・ミュレーン William Mullen 教授が中国思想における判断力概念の探求可能性を示唆し

て下さいました。その後2012年のこと、飯田泰三先生の招きで来学された崔相龍先生から東西を越えて広がる中庸思想の洋の東西を超えた普遍性を伺ったとき、ミュレーン先生の言葉が蘇ってきたのです。

重要なことを申し添えなければなりません。北東アジア研究は本学の研究の重要な柱ですが、もう1本の柱である総合政策学との相互理解と連携を忘れてはならないでしょう。私自身、昨年度まで総合政策学にかかわる学内委員会に所属し、自らに課した課題をこれから仕上げたいという思いがあります。本センターの同僚が「北東アジア研究にこだわらずに地域政策をもやってみたい」と語るのを聞いたとき、かくも学問的朗らかさのある研究所で仕事ができることの喜びが湧き上がってまいりました。

2010年の春、バード大学の構内を、図書館長であるジェフリー・カツツ Jeffery Katz 先生に導かれアレントの墓所に向かって歩く道すがら、偶々生まれ年が同じであることがわかりました。先生は「20世紀の悪い方の半分ですね」と仰ったのです。これは軽い驚きでしたが、ある意味で納得のいくものです。そしてもし中国人であるなら、韓半島の出身者であるならどう答えるだろうかと想像してみるのです。

回顧と展望

(NEARセンター研究員
2012年度研究活動自己点検)

《NEARセンター研究員（2012年度から所属継続）が、過去1年間の研究活動を振り返り、今後の展望を語ります（編集部）》

NEARセンター長 李 曉東

2012年度の研究は、主として本学の国際学術交流を中心に展開しました。まず、研究成果としては、前年度に北京大学国際関係学院との共同主催で開催した国際シンポジウムの成果をまとめたものとして、『転

形期」における中国と日本——その苦悩と展望』（国際書院）を飯田泰三先生との共編で上梓しました。本書は、ともに「転形期」に直面している日中両国がそれぞれ多くの「苦悩」を抱えているなかで、対立、対抗よりも、「共同体」に向けての歩み寄りの重要性を説きました。日中の学者による真摯な対話から生まれた本書は開かれた姿勢を貫いており、率直な対話自体が1つの可能性を示したと思います。日中国交回復40周年という「不惑」を迎えた記念すべき年であるにもかかわらず、日中関係が大きな岐路に立たされたという時期であっただけに、少々遅れた本書の出版が皮肉にも時宜にかなったものとなりました。また、本書のテーマと関連して、中国の学術誌『外交観察』（2012 秋季号、中国社会科学文献出版社）に、中国語の論文「中国対日外交的課題」を寄せました。

研究活動では、まず、本学の代表団の団長として、山東省済南市で行われた日中韓国際シンポジウム「ポスト金融危機における北東アジア地域の発展と協力」（山東省社会科学院主催、韓国啓明大学、鳥根県立大学共催）に出席しました。それから、同じ時期に、日中国交正常化40周年の記念として開催した清華大学日本研究センター主催の国際シンポジウム「改革開放以来中国の社会変革と日本」に参加し、「日本から見た中国外交」と題する報告を行いました。両会議とも、日本による尖閣諸島国有化の直後というもっとも緊張したなかでの開催であり、日中関係を生きる者として無力さを感じつつも、精一杯の努力をした次第です。

そのほかに、北京大学国際関係学院で行われた座談会「『北京コンセンサス』と日中関係の行方」で、北京大学の潘維教授、王逸舟教授、清華大学の崔之元教授らと交流することができ、収穫が大きかったです。中国の今後の行方を考えるには大いに参考になりました。また、横浜国立大学で行われた国際ワークショップ「Translating the West, Past and Present: Japan, China and Korea」で、「本業」である「近代中国の『国会』

に対する理解と受容」について報告を行い、内外の研究者と充実した議論ができました。

NEAR センター副センター長 福原 裕二

昨夏もまた、韓国東海岸（日本海側）の漁港及び鬱陵島と中朝国境地域へ「定点観測」のために赴いた。漁港及び鬱陵島の調査は、科研（「新視角に基づく竹島／独島の総合的研究」）の一環だ。そこでは、「領土問題」やこれをめぐる言説が、如何に「領土」を生活圏に含めざるを得ない地域漁業の実態を歪め、漁業者の存在や主張を不可視なものにしているかを実証しようと努めた。



また、今や「竹島（独島）の属島」と化した観のある鬱陵島に対して、「『鬱陵島』そのものに立ち入った歴史具体的分析を深める」（池内敏氏）べく、情報収集に励んだ。上の画像は、済州島より海女として鬱陵島へ移住したハルモニ（おばあちゃん）に話を聞いている様子である。これらの成果としては、①「植民地朝鮮期の鬱陵島日本人社会—鬱陵島友会と『鬱陵島友会報』を中心として—」（『総合政策論叢』第25号、2013年2月）と題する論説をまとめたほか、②「統計から見る植民地朝鮮期の鬱陵島社会」（第3回鬱陵島フォーラム、於韓国鬱陵島）、③「変わりゆく鬱陵島社会」（第8回

松下幸之助国際スカラシップフォーラム、2012年10月20日、於東京大学)、④「竹島／独島研究における『第三の視角』から」(第13回日韓政策対話、2013年1月15日、於韓国扶余)と題するそれぞれの報告を行い社会還元した(つもりだ)。

一方、中朝国境地域での「定点観測」は、5年目に突入する。北朝鮮の現状分析や脱北者の状況などを調査することが目的であるが、5年も通えば、自ずと変化が見えてくる。たとえば、丹東・新義州では、鴨緑江に船を漕ぎ出でている釣り人が突然我々のモーターボートに近づいてきて、船尾に隠していた北朝鮮製と思われるお土産品を「100円で買わないか」と声を掛けてきた。お土産品は、丁寧にも「韓国アパレル」と書かれたビニール袋に入れて手渡してくれる(下の画像)。中朝国境地域では、中国側から遠目に北朝鮮の人々を眺めたり、撮影したりすることは許されていたものの、接触は厳しく禁じられていたはず…。「人民生活問題の解決」(金正恩氏)が強く叫ばれるがゆえの商魂のたくましさだろうか。こうした調査に基づく成果は、⑤「朝鮮民主主義人民共和国の『核』をどう考えるか」(慶應義塾大学東アジア研究所講座2012、2012年5月25日、於慶應義塾大学)、⑥「通底する『朝鮮半島問題』の論理—北の核と領土」(「多元世界の構築とアイデンティティの創生」国際シンポジウム、2012年9月15日、於成蹊大学)と題して報告を行うとともに、目下それらを文字化することに勤しんでいる。



2013年度からは新たな科研(「領土問題と漁業問題の交錯状況の克服」)がスタートした。日韓に限定してきた視野を広げ、北東アジアに拓く海をまさにその広大な視点から捉え、如何に線で区切られてきた「不動の海」から、波のように「流動する海」を取り戻すかを考察していくつもりだ。しばらくは、その考究活動が中心となろう。

NEARセンター長補佐 **江口 伸吾**

2012年度の研究活動では、現代中国の動向を内政と外交の両面から考察する機会に恵まれた。

1つは、日中関係をめぐって考察したことがあげられる。とくに笹川日中友好基金の日中関係40年史のプロジェクトに参加し、両国の国内・国際環境の変遷の歴史的コンテクストを整理する機会を与えられ、その成果として、『日中関係史1972-2012 I 政治』(共著、高原明生・服部龍二編、東京大学出版会、2012年、第11章「橋本首相のユーラシア外交と江沢民主席の来日 1997-98年」を分担執筆)を公表した。昨年、日中両国は、国交正常化40周年という記念の年を迎えたが、尖閣諸島問題によって両国関係は最悪の状況となってしまった。本研究プロジェクトを通して、このような時にこそ両国関係を冷静に見つめ直し、未来を構想する知恵の創出が求められていることを学んだ。

次に、近年の中国の台頭とその国際的影響力の拡大を「北京コンセンサス」として捉えようとする動向について考察したことがあげられる。とくに、昨年9月には、北東アジア地域学術交流研究助成金『「北京コンセンサス」と日中関係の行方—北東アジアにおける国際秩序の変化をめぐって—』(研究代表:江口伸吾)の研究活動の一環として、北京大学国際関係学院と学術討論会「“中国模式”的思考」を開催し、中国モデルの可能性や問題点に関して意見交換した。この点に関して、中国国内では、リベラルと新左派との間で論争が繰り広げられているが、その一端に触れる貴重な機会となった。

最後に、現代中国の政治社会の変化に関する考察を進めたことである。とくに、昨年に引き続き、所有権改革の問題に焦点を当て、物権法の成立過程の論争点を整理することによって、社会主義体制の根幹が問われている現実を再認識した。この研究の成果として、『転形期における中国と日本—その苦悩と展望—』（共著、飯田泰三・李曉東編、国際書院、2012年、第5章「社会主義市場経済体制における所有権改革と基層社会の変容—物権法と転形期の政治社会—」を分担執筆）を公表した。なお、本稿は、日本学術振興会科研費基盤研究（C）「現代中国における所有権改革の基礎的研究—基層社会の政治社会学的考察を通して—」（研究代表：江口伸吾）の成果の一部となっている。

現在、中国は、大国化の過程で影響力を拡大させているが、内部に抱える問題や矛盾もそれと比例するように増幅している。今後、内政と外交の相互関連性に着目しながら、これらの問題を考察していきたい。

NEAR センター研究員 **石田 徹**

2012年度の研究活動はおおよそ以下の通りである。

①「近代移行期における東アジア国際秩序」に関する研究：2012年度から日本学術振興会科学研究費補助金・若手研究（B）「〈外交儀礼〉を通じて見る近代移行期東アジアの国際秩序」（課題番号：24730147）の交付を受けることになった。2012年度は主に長崎県対馬歴史民俗資料館での宗家文庫の史料調査と外務省外交資料館での史料調査を中心に行い、関連史料を収集した。目下その整理・分析中である。

②朝鮮観に関する研究：2012年12月4日に韓国慶尚大学校慶南文化研究院主催で開催された「壬辰戦争420周年記念国際専門家学術会議」において「明治期における『文禄・慶長の役』」と題する報告を行った。なお、この内容は『慶南学』第33号（2012年12月刊・韓国語）に掲載された。

③NEAR センターでの出張：2012年5月17日～19日の韓国晋州・順天・高霊・金海への出張では、順天大学校で行われた東アジア山岳文化研究会国際シンポジウムへの参加を初め、韓国における「天孫降臨」関連の史跡を実見した。2012年8月23日～29日の中国延辺朝鮮族自治州調査出張（延辺済州プロジェクト）では、白頭山（長白山）を初め、延辺朝鮮族自治州の史跡を訪れ、また中朝国境から北朝鮮を直接目にする事ができた。個人的には初めての中国訪問で、多くの「感覚」を得られた貴重な経験となった。2013年3月19日～26日の韓国済州島調査出張（延辺済州プロジェクト）では、「済州に流された流人と済州島」と「済州島に残るモンゴルの痕跡」をそれぞれ調査した。なお、以上3つの出張はすべて井上治センター長（当時）、飯田泰三研究員と共に行動した。

今年度以降の展望としては2点挙げておく。

①「近代移行期における東アジアの国際秩序」に関する研究：引き続き科研費の研究課題に取り組む。今年度は韓国国史編纂委員会所蔵の宗家文庫の調査をメインに考えている。また、今年度は、科学研究費助成事業の研究成果公開促進費の交付を受け、2007年に提出した博士論文を加筆修正したものを出版する予定である。

②韓国政治思想に関する研究：飯田泰三研究員・井上厚史研究員と共同で行っている朴忠錫『[第2版] 韓国政治思想史』の翻訳作業が佳境を迎えており、遅くとも来年度には出版する予定である。

NEAR センター研究員 **井上 治**

昨年度は、代表と分担含め、科研5、学内3、地方自治体1の研究プロジェクトや刊行作業にかかわり、これまで経験したことのないほどの忙しさでした。

月1回の東京での研究会に加え、5月はウランバートルの公文書館でカザフ人関係資料の調査、韓国の順天大学校でのシンポ

ジウム報告と朝鮮半島南部で古代日本に縁があるとされる所の見学。6月にはクラクフで、7月には天理大学と東京大学でそれぞれ資料調査。夏期休業期間はフフホトでの共同研究と五台山での調査を行ってすぐに延辺での調査。10月は県民有志と新疆で調査。11月には再びクラクフに行って研究報告。12月は雲南と四川に住んでいるモンゴル族の調査。明けて1月は仙台にあるモンゴル関係の碑文を見に行き、2月は三度クラクフでの資料調査、3月は濟州島でモンゴルに縁のある所を見て回る、といった具合でした。

成果として印象深いのは、本学の出版助成を得て11月に刊行した共著 *In the Heart of Mongolia* があります。仕事の合間を縫って、3年間の共同研究の成果をまとめました。また、10月に県民有志と行った新疆での調査結果を1冊の冊子にまとめました。県民のみなさんが主体となって補助金を申請して旅費に充て、そして編集作業を分担し合い、小遣い程度の資金を出し合って、刊行までこぎ着けました。4年ほど前から県民の方とじっくり取り組んできた調査活動の集大成一歩手前の成果になりました。印象深いと言えば、センターの仲間との調査旅行の楽しさや意義深さも忘れることができません。これからもそのような調査旅行を企画したいと思います。

これだけ研究を詰め込んでしまうと、予定をこなすのが精一杯で、調査の結果をとりまとめる作業がうまく運ばないことを気にしつつも、研究で走り回れるのも今のうち、と思いながら過ごした1年でした。このように積み上げた調査の結果は、数年後にはきちんとまとめて世に問わなければならないものがあり、平成25年度に終了するいくつかのプロジェクトの成果を出すことが大きな目標です。また、複数のプロジェクトの進行管理、センターの仲間との調査旅行のアレンジなど、気にしていることがたくさんありますが、とくに気にしているのは、センター長の職を離れることができるかどうか、です。

NEAR センター研究員 佐藤 壮

2012年度の研究活動では、東アジア地域の国際秩序形成を考察することに重点を置いて、主に2つの側面から取り組んだ。

第1に、江口伸吾・NEAR センター研究員が研究代表を務めるプロジェクトに参加し、中国が国際秩序の形成にどのような影響力を持ちうるのか、考察する機会を得た。世界第2位の経済規模を持つ中国が辿った経済発展の軌跡や国際政治経済への影響力の伸張を描写し理解する際、近年の欧米学界では「北京コンセンサス」や「中国モデル」といった言葉が人口に膾炙している。しかし、これらは世界銀行や国際通貨基金など国際金融組織が標榜する「ワシントン・コンセンサス」や「西欧モデル」との二項対立的図式を適用し、中国を既存の国際秩序への挑戦者として位置づける議論であり、浅薄な印象を拭いきれない。2012年9月に本プロジェクトの一環で北京大学国際関係学院の研究者達と学術討論を重ねることで、中国の研究者が「中国模式」と呼んで検証を試みる中国の近代化過程は、中国と国際社会が摩擦・対立・受容を絶え間なく繰り返しながら相互に触発する過程でもあるとの着想に至った。中国の台頭は、主権国家体制を基盤とする国際秩序に本質的な変容を迫るものなのか、あるいは既存の国際秩序内のガバナンスにおいて主導権の移行をもたらすものなのか、実証的に検証を進めていくのが2013年度以降の研究課題となっている。まずは、2013年度中に開催する学術シンポジウムで報告をおこなう予定である。

第2に、近年の東アジアにおける安全保障・防衛協力の進展を「安全保障アーキテクチャー」の構築であるとみなす議論の妥当性を検討する作業を始めた。従来、東アジアの安全保障については、アメリカを中心とする二国間同盟の東とASEAN地域フォーラムなどの多国間安全保障枠組みとが重層的に共存する姿が描写されてきたが、その「重層性」の機能・有効性・正統性などについて実証的な分析が欠けていた。

安全保障アーキテクチャー論は、二国間主義対多国間主義の描写にとどまらない機能主義的な分析枠組みを提供しているが、従来のレジーム論やガバナンス論との関連性を十分に検討しきれていないようである。2012年度は文献調査を進めると同時に、東アジア各国の安全保障・防衛協力の実態把握に務めた。今後は、安全保障アーキテクチャー論が抱える上記の論点を実証的に検証し、論文執筆に取りかかる予定である。

NEAR センター研究員

バールィシエフ、エドワルド

2012年度において、研究実施計画に沿って、東京の研究出張（7月中旬）を行なったほか、8月26日から9月8日の間、スタンフォード大学フーバー研究所を訪ね、遂行中の科研プロジェクト（「第一次世界大戦期における《日露兵器同盟》の実像」）を進展させるために欠かせない「ポドチャーギン・コレクション」の史料を多量に閲覧・複写できた。現在、その史料の熟読・整理に取り掛かっており、今後の研究計画の更なる具体化を図っているところである。

科研プロジェクトに関する新たな研究成果を公表することはなかったが、武器発注供給事業を中心とした戦時中の日露軍事協力関係を総括する論考をまとめ、アメリカの学術雑誌に投稿した（今、査読中）。なお、当時の日露関係を論じるに当たって重要と思われる国際金融状況について学び、ロシア語で1個の論文を発表した（「日露戦争後の日本とパリ金融市場（1905年9月～1907年3月）」学術論文集『日本年鑑 2012』モスクワ、2012年9月）。

科研プロジェクト以外にも、研究視野を広げる機会がいくつか訪れてきた。8月中旬、市民研究員阿部志朗氏に同行して、ロシア連邦サハリン州を訪問したが、それをきっかけに、北海道やサハリンのロシア研究者たちと交流を深め、新たな研究領域に目をつけることができた。10月19日、ユジノサハリンスク市で開かれた国際学術会

議「サハリン州——歴史、現状および見通し」に参加し、「19世紀後半におけるオホーツク・カムチャッカ地方と日露関係」という報告のなかで、3年前から進めてきた「北東アジアにおける日露実業的ネットワーク」に関わる研究の成果を公開した。

そのほか、9月25日、鳥根県立大学の代表として、中国の済南市で開催された国際学術シンポジウム「ポスト金融危機における北東アジア地域の発展と協力」に参加し、「ロシアからみた《北東アジア》——歴史、現状およびその見通し」について発表を行なった。また、10月6日、同志社大学で開催され、「ロシア・東欧学会 JSSEES 2012年合同研究会大会」内で設けられたJSSEESシンポジウム「主教セルギイとネフスキー——日露交流の光と影——」にコメンテーターとして参加し、最近の研究動向を再確認することができた。

NEAR センター研究員 **林 裕明**

2012年度の研究において重点的に取り組んだ課題は以下の3点である。研究成果一覧は末尾に示しているのご参照いただきたい。

①働き方と労働モチベーションの日ロ比較研究

日本とロシアを例に、経済システムの多様性と労働モチベーションとの関係について実証および理論的に接近した。K. ポランニーやS. コーヘンその他の研究成果にもとづいて、市場・国家・伝統という3要素の相関に加え、社会のもつ価値観を通じて労働のあり方を捉えるという研究の枠組み作りをおこなった。この枠組にもとづいて日本とロシアの働き方を比較検討し、①日本とロシアの労働のあり方が対照的であり、いずれも欧米の資本主義における労働のあり方と比較した際に相違が大きいこと、②両国の労働のあり方には独自の社会制度や価値観を反映した合理性が観察されることを指摘した。他方、労働モチベーションの

捉え方、分析手法、なぜ日ロ比較なのかといった点には明確な答えを出すことができなかった。今年度は上記課題を克服するとともに、日ロ比較の枠を超え、経済システムの多様性と労働モチベーションに関する比較経済学分析という形に発展させていきたいと考えている。

②経済システムとそこでの人間像について

過去の論者の見解に対するレビューを通じて、資本主義・社会主義両経済システムにおいて想定されてきた人間像・人間類型の特徴を理論的に整理することを目的に、NEAR センター客員研究員である新井健一郎氏とともに読書会を実施した。購読した文献は、トマス・ホッブズ『リヴァイアサン』、デイヴィッド・ヒューム『人性論』、アダム・スミス『道徳感情論』、アンリ・ド・サン＝シモン『産業者の教理問答』、ロバート・オウエン『社会制度論』である。以上の著述家の人間に対する見解を整理することを通して、一般的に資本主義と親和的であると考えられているスミスの人間観には実は資本主義的人間をこえうる要素も含まれていること、また逆に社会主義思想の嚆矢と理解されているサン＝シモンの人間像は実際にはきわめて資本主義的であると考えられることなどが明らかとなった。また、資本主義社会や新古典派経済学が前提としている人間像の源泉や根拠を一定程度、浮かび上がらせることができ、さらにはそれを相対化するいくつかの視点も確認することができた。本研究は今年度も継続して取り組む予定である。

③経済システム面から見た「北東アジア学」創成のための研究

日本とロシア両国の経済システムの変容を比較分析することを通して、経済システム面から見た学問としての「北東アジア学」の創成につなげたいと考えている。ここでは、北東アジア地域における旧社会主義諸国の資本主義への経済システムの転換が北東アジア地域経済へ与える影響を「超域」

と捉えている。経済システムの転換は北東アジア地域における経済交流を促進してきた（その意味で「超域」）と同時に、日本とロシアに代表されるように、経済システムの転換による経済交流の活発化が相対的に抑制されている（その意味で「超域」されない）例も見られる。経済システムが転換し、各国で市場経済化が進んでも（「収斂」）、各国の経済システムには独自性が観察され、特定の資本主義のタイプへの収斂は見られていない（「拡散」）ことが、この背景にあると考えられる。こうした視点から、経済システム論の観点から学問としての「北東アジア学」の創成につなげる糸口を見出したいと模索している。

【研究成果一覧】

- ・論文「労働モチベーション比較研究の分析枠組」『労働モチベーションの比較経済学分析』（京都大学経済研究所平成24年度プロジェクト研究成果報告書）、2013年3月。
- ・報告“Can Japanese Model of the Transformation of Workers' Motivation be Generalised in Comparison with Russia?,” 12th Bi-Annual Conference of European Association for Comparative Economic Studies, University of the West of Scotland, 7th September 2012.
- ・報告「労働モチベーションの日ロ比較の分析枠組試案」国際コンファレンス「経済システムの変容と労働モチベーション」於 京都大学、2013年1月27日。
- ・報告“An Analytical Framework of Comparative Study on Work Motivation,” 10th Biennial Pacific Rim Conference, Western Economic Association International, Keio University, 15th March 2013.

NEAR センター研究員 **ムンフダライ**

平成24年度の研究活動は、主に、(1) 科研費・研究活動スタート支援の研究課題「コーパスに基づく『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳方式の研究」（平成23年度～平成24年度）、(2) 科研費・基盤研究（C）の研

究課題「新発見の音声資料によるモゴール語の総合的研究」(代表：東京学芸大学齋藤純男教授、研究期間：平成24年度～平成26年度)、(3) 鳥根県立大学学術教育研究特別助成金(個人研究分)の研究課題「雲南と四川のモンゴル人集団の文化に関する調査研究」(平成24年度)、という3つの課題を中心に展開した。

研究課題(1)に関しては、平成24年度は主に『元朝秘史』の音訳における特殊表記方式について検討し、特殊表記の規則を明らかにした。その結果を論文にまとめ、『北東アジア研究』第24号(2013年3月)に掲載した。また、昨年度に引き継ぎ、全音訳漢字の使い分けの分析に専念し、音訳方式の全体像の把握に努めた。また、9月21日から27日にかけて、北京で文献資料の調査を行った。本研究は平成24年度をもって、予定通りに終了した。

研究課題(2)に関しては、鳥根県立大学メディアセンター服部四郎ウラル・アルタイ文庫所蔵モゴール語音声資料の研究に取り組んでおり、平成24年度は、東京学芸大学で行われた計10回のモゴール語研究会に参加し、モゴール語音声資料の分析と記述を行った。

研究課題(3)に関しては、2012年12月16日から25日にかけて、中国の雲南省通海県の興蒙郷と四川省塩源県にて現地調査を行い、当地域に居住するモンゴル族の人々(13世紀に進出したモンゴル人の後裔)の文化と言語状況について調査を行った。今後、現地調査によって得られた資料をもとに、更なる考察を加えていくつもりである。

平成25年度の研究活動に関しては、昨年度に引き継ぎ、モゴール語の研究に取り組んでいく。また、本年度採択された科研費・基盤研究(C)の研究課題「アルタイ諸語の「華夷訳語」のコーパス構築と漢字音訳方式の研究」(平成25年度～平成27年度)および学術教育研究特別助成金の研究課題「コーパスに基づく『日本館訳語』の漢字音訳方式の比較研究」(平成25年度)に取り組み、モンゴル語だけでなく、他の北東アジア諸

言語も視野に入れて、漢字音訳に関する通言語的研究を展開していく所存である。

NEAR Recommends

《NEARセンター研究員が、硬軟織り交ぜてお薦め図書を紹介します(編集部)》

NEARセンター研究員 **石田 徹**

忙しい毎日に追われているうちに、あの3月11日から2年半が過ぎる。すでに手垢の付いた表現になるが、311は「日本の歴史」の大きな画期になっている。ここではそのキーワードとして「当事者」を挙げたい。震災と原発事故は、私たち1人1人に「あなたはどうか生きるのか」、つまり社会の諸問題を自分の問題として——「当事者」としてどう受け止めるのかを問いかける大きなきっかけになったのではないだろうか。そこで「当事者」をキーワードに3冊の本を紹介したい。因みに3冊とも311後に刊行されたものだ。

まず、ストレートに『「当事者」の時代』(佐々木俊尚・光文社新書、2012年)。本書は、メディアの言論が立ちゆかなくなってきた状況を「マイノリティ憑依」という視角から論じている。マイノリティ憑依とは、自身の立場を離れマイノリティ(弱者・被害者)の立場に立ってしまうことである。これによって社会の諸問題に対して痛烈な批判が可能となる。こうしたマイノリティ憑依はマスコミだけではなく、個々人のレベルでも起きているが、これはあくまでも「憑依」であって批判者はその「当事者」ではないという点に大きな問題がある。昨今の「ブログ炎上」や厳罰志向の一因はこの辺にありそうだ。「絶対に正しい」という僻見の下、断定的口調で激しい内容を書き連ねることの意味を一度立ち止まって考え直す必要があるだろう。

続いては『いま、地方で生きるというこ

と』（西村佳哲・ミシマ社、2011年）。東北と九州に暮らす10人へのインタビューによって、各自がいかなる考えから「地方」で生きようになったのかが示される。ありがちな「田舎移住推奨」ではなく、1人1人が自分自身の問題と向き合う中で「地方」生活を選んでいる様子は、「当事者」としての生き方を映し出している。筆者自身2011年に東京から浜田に移ってきたこともあって「地方で暮らす」ということを強く意識した時に出会った本で印象深い。都会に倣え、ではない「地方」が採る道は何なのかを考えさせてくれる。奇しくも2011～12年度にNHK（中国地方）が組んだ「里山資本主義」特集も「地方（里山）」でどう暮らすかをクローズアップしたもので、筆者にとっては不思議なシンクロであった（付記：なお、この放送内容は今夏書籍化された。『里山資本主義』（藻谷浩介・NHK広島取材班、角川書店、2013年）である）。

最後に、『小商いのすすめ』（平川克美・ミシマ社、2012年）。「小商い」とは「ヒューマン・スケール」の日本語訳であり、『いま・ここ』にある自分に関して、責任を持つ生き方を指す。著者はこれを、「グローバルイズム」や「経済成長」——これらは都会の論理でもある——に狂奔する風潮へのアンチテーゼ、すなわち人類史上初の「縮小均衡」状況を生きる方策として提示している。「これまで通りでよいのか」という著者の問いかけは、真摯で重い。地に足を付けて、自分の身の周りから始めようと説く本書からは、やはり「当事者」という立ち位置の大切さが浮き彫りになる。

「当事者」として生きるということ、それは、煽られず、急かされず、地に足を付けて生きるということであり、安易な英雄待望論への防波堤ともなる。私（たち）が直面する問題を解決するのは「他の誰か」ではなく私（たち）なのである。決して楽な道ではないが、着実な道であり、それだけ魅力的な道であるように、筆者は思う。

NEAR 短信 (2013年4月～9月)

○第32回日韓・日朝交流史研究会、北東アジア研究会第1回例会

【日 時】2013年4月25日(木)16:30-18:00

【場 所】講義・研究棟2階 会議室 A

【報告者・テーマ】岩下明裕（北海道大学スラブ研究センター教授）「日本の領土問題：解決に向けた提言」

○北東アジア研究会第2回例会

【日 時】2013年7月2日(火)16:40-18:40

【場 所】講義・研究棟2階 会議室 A

【報告者】①林裕明（本学准教授）「労働モチベーションの問題について」
②新井健一郎（NEARセンター客員研究員）「ニューレフトの社会主義ヒューマニズム」

○国際シンポジウム「北東アジア協力の新課題」

【日 時】2013年7月5日(金)10:00-17:10

【場 所】島根県立大学交流センター2階
コンベンションホール

【主 催】島根県立大学・復旦大学国際問題研究院

【報告者】挨拶・本田雄一（島根県立大学学長）、沈丁立（復旦大学国際問題研究院常務副院長）、第1セッション「北東アジアにおける中国の役割」：司会・井上治（島根県立大学）、コメンテーター・鹿錫俊（大東文化大学）、報告①沈丁立（復旦大学）「中国の安全政策とその国際的反応」、②豊田知世（島根県立大学）「中国の気候変動対策と日本の国際協力」；第2セッション「朝鮮半島をめぐる新たな動向」：司会・石田徹（島根県立大学）、コメンテーター・金映根（韓国高麗大学）、

報告①石源華（復旦大学）「北東アジアにおける地域協力と中韓関係」、②福原裕二（島根県立大学）「朝鮮民主主義人民共和国の新体制とその展開」；第3セッション「北東アジアにおける経済協力」：司会・村井洋（島根県立大学）、コメンテーター・江口伸吾（島根県立大学）、報告①胡令遠（復旦大学）「価値理念と中日関係」、②張忠任（島根県立大学）「北東アジア経済関係における向心力と遠心力」

○北東アジア研究会第3回例会

【日時】2013年7月22日(月)16:00-18:00

【場所】講義・研究棟2階 会議室B

【報告者】①飯田泰三（本学教授）「『グレアム・ウォーラスの思想世界—来るべき共同体論の構想』（未来社、2013年）の書評」、②平石耕（成蹊大学法学部准教授）によるコメント

○第33回日韓・日朝交流史研究会

【日時】2013年7月26日(金)16:30-18:00

【場所】講義・研究棟2階 会議室B

【報告者】①金龍珉（韓国・東西大学校）「日韓経済協力の実態—福岡—釜山超広域経済圏におけるネットワークの有効性」、②朴昶建（韓国・国民大学校日本学研究所）・金志叡（韓国・慶南大学校大学院政治外交研究科博士課程）「北東アジア地域協力としての韓中境界画定—離於島の戦略的位置付け」、③金仙熙（NEARセンター客員研究員）「近代都市文化再生とコミュニケーション—群山を事例に」

○中国・東北師範大学東亜文明研究中心と交流協定を締結（2013年9月19日）

NEARセンター市民研究員の活動一覧 (2013年4月～9月)

○平成25年度NEARセンター市民研究員と大学院生の共同研究助成事業に3件の研究課題が採択されました。

- ・バダムサンブー ヒシグスレン、岡崎秀紀「モンゴル国の低学歴貧困家庭からみた現代モンゴル都市社会—学歴と将来に関する親と子どもの期待を手がかりに—」
- ・哈麗娜、小菅良豪、若林一弘「大興安嶺におけるトナカイエヴェンキ人の生活変化と自意識に関する研究—森林内外生活の変化と実態を中心に—」
- ・孫美玲、大橋美津子「中国朝鮮族における高齢者介護と家族・ジェンダー規範に関する社会学的研究—中国黒竜江省穆稜市A鎮の高齢夫婦間介護を対象にして—」

○第1回NEARセンター交流懇談の集いの開催（2013年4月20日(土)13:00-17:00）

○第2回NEARセンター交流懇談の集いの開催（2013年5月11日(土)13:00-17:00）

○第1回市民研究員全体会の開催（2013年5月25日(土)13:30-17:00）

○第1回市民研究員研究会の開催（2013年7月13日(土)13:30-17:00）：第2回アカデミックサロン（江口伸吾研究員）、市民研究員発表（湯谷口初實氏、坂東朋子氏、中政信氏）

NEAR News 第44号

2013年12月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near>